

# 古文攻略法

## 入試★古文基本情報

① 配点十二点

② 出題形式

- ・ 主語を問う問題
- ・ 現代語訳を問う問題
- ・ 理由を問う問題
- ・ 抜き出し問題
- ・ 記述問題
- ・ 仮名遣い問題
- ・ 主題や要旨の問題
- ・ ごくまれに古文単語

## 入試★古文の特徴

現代語訳が付いていることが多いので、古文という感覚はなくても解ける！（注もある）次のことを心がけよう。

- ① 深い読解は、全くいらぬ。難しいと感じる部分は飛ばして読むのがコツ。
- ② 細かい点はこだわってはダメ。文章全体が「何を・どんなふう書いてあるのか」を理解するだけでいい。
- ③ 登場人物が「何をして、何を感じ、思っているのか」をつかんでいく。ひねった解釈はいりません。当たり前の解釈で構いません。

# 入試★知ってトクする法則

随筆・説話・評論などでは、

主題や要旨など文章のまとめを問う問題が出題された時は「最初」「最後」の文で「最も言いたいこと」を述べることが多い。

## 入試★説話文学は四つのパターンだけ

- A 失敗談などの面白い話をしながら、実は人間は「こういったところに気をつけて生きていこう」のような「教訓」を導くパターン
- B ケチな僧侶や自慢をしまくっている人物が、幼い子どもや身分の低い者に見事にやりこまれるパターン
- C 神仏による奇跡の話、妖怪変化と見えた出来事が、実は単なる自然現象や動物の仕業だったパターン
- D 信仰の厚い者や心優しい人物に対して、神仏がその生き方を知り、助けてくれるパターン

## 入試★随筆文学の読み取るべき内容

- A 人生のあり方
- B 人への心配りの大切さ
- C その道の達人の話

最初か最後の文にエピソードをまとめる内容が書かれることが多く、入試古文の場合は、それを解答させる問題がある。AとCを念頭に入れておくと便利。

次のページからは実際に入試レベルの問題を解いていきますので、一歩一歩慣れていきましょう。

# かなづかいの問題



## □□まとめ□□

語頭以外の

### ルール①

← は  
 ( )  
 ( )  
 ← ひ  
 ( )  
 ( )  
 ← ふ  
 ( )  
 ( )  
 ← へ  
 ( )  
 ( )  
 ← ほ  
 ( )

### ルール②

← ぢ  
 ( )  
 ( )  
 ← づ  
 ( )  
 ( )  
 ← む  
 ( )

### ルール③

← ゐ  
 ( )  
 ( )  
 ← ゑ  
 ( )  
 ( )  
 ← を  
 ( )

### ルール④

← や  
 ( )  
 ( )  
 ← う  
 ( )

### ルール⑤

← し  
 ( )  
 ( )  
 ← う  
 ( )

### ルール⑥

← け  
 ( )  
 ( )  
 ← ふ  
 ( )

ア段十う(ふ) ↓ オ段十う

イ段十う(ふ) ↓ イ段十う

エ段十う(ふ) ↓ エ段十う

入試では「かなづかい」の問題が出題されます。ルールをおさえておけば必ず得点できるものなので、確認しておきましょう。

### 確認問題

次のそれぞれの語を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなに直しなさい。

- ① あはれ ↓ ( )
- ② みづ ↓ ( )
- ③ をとこ ↓ ( )
- ④ 据ゑる ↓ ( )
- ⑤ やうやう ↓ ( )
- ⑥ あやしう ↓ ( )
- ⑦ てふてふ ↓ ( )

■練習問題■

問 次のそれぞれの語を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなに直しなさい。

- |   |        |   |       |
|---|--------|---|-------|
| ① | にほひ    | ② | にはとり  |
| ③ | うへ     | ④ | ゆゑ    |
| ⑤ | みなか    | ⑥ | いふ    |
| ⑦ | てふ     | ⑧ | いみじう  |
| ⑨ | ぐわんじつ  | ⑩ | くわういん |
| ⑪ | おのづと   | ⑫ | をんな   |
| ⑬ | いはれけり  | ⑭ | いきほひ  |
| ⑮ | かなしう   | ⑯ | 見みたりし |
| ⑰ | けふ     | ⑱ | さう    |
| ⑲ | 答へていはく | ⑳ | 作りやう  |

■実戦問題■

その 園の別当入道は、①さうなき包丁者なり。ある人のものにて、いみじき鯉を出だしたりければ、皆人、別当入道の包丁を見ればやと②思へども、たやすくうち出でんもいかかと、③ためらひけるを、別当入道さる人にて、「このほど百日の鯉を切りはべるを、今日欠きはべるべきにあらず。まげて申し請けん。」とて、切られける、いみじくつきづきしく、興ありて、人ども④思へりけると、ある人、北山太政入道殿に語り申されたりければ、「⑤かやうの事おのれはよにうるさく覚ゆるなり。切りぬべき人なくば、たべ。切らんと⑥言ひたらんは、⑦なほよかりなん。なんでふ百日の鯉を切らんど。」と⑧のたまひたりし、⑨をかしく覚えしと、人の語り⑩たまひける、いとをかし。

問 ——線部の語を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなに直しなさい。

- |   |     |   |     |
|---|-----|---|-----|
| ① | ( ) | ② | ( ) |
| ③ | ( ) | ④ | ( ) |
| ⑤ | ( ) | ⑥ | ( ) |
| ⑦ | ( ) | ⑧ | ( ) |
| ⑨ | ( ) | ⑩ | ( ) |

次のページから古文の読解演習をします。できるだけ順番通りに解いて下さい。

# 入試レベル★古文問題演習



一 次の古文を読んで、あとの各問いに答えなさい。

ある時、狐、餌食を求めかねて、\*ここかしこさまよふところに、鳥、肉をくはへて木の上におれり。狐、心に思ふやう、我、この肉を\*取らまほしく覚へて、鳥のいける木のもとに立ち寄り、「①\*いかに御辺、御身はよろづの鳥の中に、すぐれてうつくしく見えさせおはします。然りとはいども、少し事足り給はぬ事とは、御声の鼻声にこそ\*侍れ。ただし、この程\*せじやうに申しは、御声もことの外、よく渡らせ給ふなど申してこそ候へ。\*あはれ、一節聞かまほしうこそ侍れと申しければ、鳥、この儀を、\*実<sup>げ</sup>にやと心得て、「さらば、声をいだしむ」とて、口を\*はたける隙<sup>ひま</sup>に、終に肉を②落としぬ。狐、これを取つて逃げ去りぬ。

『伊曾保物語』による

- \*ここかしこ＝あちらこちら
- \*取らまほしく＝奪い取りたい
- \*いかに御辺、御身はよろづの鳥の中に＝やあ、貴殿、あなたはすべての鳥の中でも
- \*侍れ＝ごさいます
- \*せじやうに申しは＝世間では
- \*あはれ＝ああ
- \*実にやと＝本当と
- \*はたける隙に＝口を開けたとたんに

問一 ①いかに御辺 から狐の会話が始まっています。その会話の終わりはどこですか。最後の十字を書きなさい。


問二 ②落としぬ とありますが、その主語に当たる動物を漢字一字で書きなさい。

--

問三 本文が示す教訓として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 他人におだてられてそれを本気にすると失敗する。
- イ 自分の利益のためには、手段を選んではいけない。
- ウ 他人を褒めると、自分の利益が損なわれ失敗する。
- エ 他人を褒めると、必ず成功する。
- オ いかなる場合も、逃げ足は速い方がいい。

--

★会話の終わりを表す言葉★

「……………」と……………」

二 次の古文を読んで、あとの各問いに答えなさい。

あるとき、ねずみ相集まりて\*せん議しけるは、「いつもかの猫といふいたづら者にほろぼさるる時、千たび悔やめども、\*その益なし。かの猫、声を立つるか、しからは足音高くなどせば、かねて用心すべけれども、ひそかに近づきたるほどに、油断して取らるるのみなり。いかがはせん。」と言ひければ、古老のねずみ進み出でて言ひけるは、詮ずる所、猫の首に鈴を付けておかば、① やすく知りなんと言ふ。皆々、「もつとも。」と同心しける。「然らば、このうちよりだれ出でてか、猫の首に鈴を付けんや。」と言ふに、② 「我付けん。」と言ふ者なし。これによって、そのたびの\*議定事はらで退散しぬ。

〔伊曾保物語〕による)

\*せん議 || みんなで話し合うこと。

\*その益なし || どうにもならない。

\*議定 || 「せん議」に同じ。

問一 古老のねずみの言葉のうち「　　」でくくられていないものが一つあります。それを抜き出し、その初めの四字を書きなさい。

--	--	--	--

問二 ① やすく知りなん とありますが、どんなことを簡単に知ることができのでしょうか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 猫が近づいてくること。
- イ 猫の首に鈴が付いていること。
- ウ ねずみが用心をしていること。
- エ 古老のねずみが言ったこと。

--

問三 ② 「我付けん。」と言ふ者なし とありますが、なぜねずみたちはだれも猫の首に鈴を付けようと言わなかったのですか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 猫の首に鈴を付けても、全然効果のないことが分かっていたから。
- イ 他の方法を試して、様子を見たかったから。
- ウ ねずみたちは猫の首に鈴を付けたがったが、古老のねずみが反対したから。
- エ ねずみたちが猫に襲われることを心配し、近づくのが怖かったから。

--

三 次の古文を読んで、あとの各問いに答えなさい。

たいそうひどく

八月十五日ばかりの月に①いでゐて、かぐや姫いといたく泣きたまふ。人目

今は人目も気になさらず

も今はつづみたまはず泣きたまふ。これを見て、親どもも「何事ぞ」と問ひ

さわぐ。

かぐや姫泣く泣く言ふ、「さきさきも申さむと思ひしかども、必ず心惑ひ

言わないままでいられようかと思つて

したまはむものぞと思ひて、今まで過ごしはべりつるなり。さのみやはとて

うちいではべりぬるぞ。おのが身はこの国の人にもあらず。月の都の人なり。

参ったのです

それを昔のちぎりありけるによりなむ、この世界にはまうで来たりける。今

は帰るべきになりければ、この月の十五日に、かのもとの国より、迎へに

どうしても帰らなければならないので

人々もうで来むず。さらずまかりぬべければ、おぼし嘆かむが悲しきことを、

この春より思ひ嘆きはべるなり。」と言ひて、いみじく泣くを、翁、「こは、

何と云うことをおっしゃるのですか

なでふことのためぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種の大きさを

おはせしを、わが丈に立ち並ぶまで養ひたてまつりたるわが子を、何人か迎

へきこえむ。まさに許さむや。」と言ひて、「われこそ死なぬ」とて、泣きの

のしること、いと耐へがたげなり。

『竹取物語』による

問一 ①いでゐて とありますが、この部分を「現代かなづかい」に直し、ひらがなで書きなさい。

問二 ②さきさきも申さむと思ひしかども とありますが、かぐや姫は親にどんなことを言おうと思つていたのですか。それが具体的に書かれてある連続する二文を本文からさがし、その初めの五字を書き抜きなさい。

--	--	--	--

問三 ③いみじく泣く とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号を書きなさい。

- ア 誰一人として自分の話を信じようと思わないから。
- イ もといた世界に早く帰りたいから。
- ウ 翁たちが悲しみ嘆く姿を見たくないと思ったから。
- エ 一所懸命に育ててくれた翁たちに感謝しているから。

問四 ④われこそ死なぬ とありますが、これは誰が言った言葉ですか。本文中の言葉で答えなさい。

四 次の古文を読んで、あとの各問いに答えなさい。

この\*清明、ある時、広沢の僧正そうじやうの\*御房ごぼうに参りて、物申し承りける間、若き僧どもが、

清明に①いふやう、「\*式神しきじんを使ひ給ふなるは、たちまちに人をば殺し給ふや」と言ひければ、

「②やすくはえ殺さじ。力を入れて殺してん」といふ。さらに、清明、僧どもに言ふに、

少しのことで

きつと殺せるでしょう。

しかし、生き返らせる方法を知らないので

「さて、虫などをば、③少しの事せんに、必ず殺しつべし。さて生くるやうを知らねば、

そんなことは意味のないことです

罪を得つべければ、さやうの事よしなし」といふと、庭に蛙の出で来て、五匹、六匹ばかり躍

りて、池の方さまへ行きけるを、僧が「あれ一つ、さらば殺し給へ。試みん」と言ひければ、

清明「④罪を作り給ふ僧かな。されども試み給へば、蛙を殺して見せ奉らん」とて、草の葉を

摘み切りて、物を誦むやうにして、蛙の方へ投げやりければ、その草の葉が、蛙の上にかかり

ければ、蛙真平まひらにひしげて死にたりけり。これを見て、僧どもの顔色変りて、恐ろしと思ひけり。

家の中に人なき時は、この式神を使ひけるにや、人もなきに、\*部しむを上げ下し、門をさしなどしけり。

〔宇治拾遺物語〕による

\*清明あべのせいめい 平安時代の役人。妖術を使えるという伝説がある。 \*御房ごぼう 僧正の住まい。

\*式神しきじん 清明が不思議な術に使う神。 \*御坊ごぼう お坊さま。 \*部しむ 日光、風雨をさえるための戸。

問一 ①いふやう とありますが、この部分を現代かなづかいに直し、ひらがなで書きなさい。

問二 ②やすくは とありますが、この言葉の意味として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 本当に    イ 急には    ウ 実は    エ 簡単には

問三 ③罪を作り給ふ僧かな とありますが、ここで言う「罪」とは何ですか。次のア～エの中から一つ選び、記号を書きなさい。

ア 帝の許可なく式神を使う罪。

イ 不思議な力で 人々をだます罪。

ウ むやみに生き物を殺す罪。

エ 尊い 式神を軽々しく扱う罪。

問四 本文の内容と合っているものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 僧たちは、仏の教えを破るような行為をしてしまったことを後悔した。

イ 清明は生き物を殺す術を持っているが、できればしたくないと思っ

ウ 広沢の僧正は、若い僧を通じて清明に蛙を殺してみせるよう命じた。

エ 清明は、草の葉で蛙を殺したあとに式神を使ってすぐに生き返らせた。



五 次の古文を読んで、あとの各問いに答えなさい。

荒れはてた野原

さて、浦島は、故郷へ帰り見てあれば、人跡絶えはてて、虎臥す野辺と

なりにけり。浦島、これを見て、「こはいかなることやらんと思ひ、ある傍

「だれかいるか」

を見れば、柴の庵のありけるに、「もの言はん」と言ひければ、庵の中か

「だれですか」

らより八十ばかりの翁出であり、「誰にて」と申せば、浦島申しけるは、「こ

浦島の家はどこにありますか

の所に、浦島の行方は候はぬか」と言ひければ。翁申すやう、「いかなる人

にて候へば、浦島の行方をば、御尋ね候ふやらん、不思議にこそ候へ。そ

の浦島とやらんは、はや七百年以前のことと申し伝へ候ふ」と申しければ、

太郎おほきに驚き、こはいかなることぞとて、そのいはれをありのままに

語りければ、翁も、不思議の思ひをなし、涙を流し申しけるは、

あそこに見えている古い塚、古い石塔こそぞ

お墓です

「あれに見えて候ふ古き塚、古き石塔こそ、その人の廟所と申し伝へてこ

そ候へ」とて、指をさして教へける。太郎は、泣く泣く、草深く露しげ

き野辺を分け、古き塚に参り、涙を流し、かくなん、

かりそめに 出でにし跡を 来て見れば 虎臥す野辺と なるぞ悲しき

さて、浦島太郎は、一本の松の木陰に立ち寄り、あきれはててぞぬたりけ

る。太郎思ふやう、「亀が与へしかたみの箱、『けつしてあけさせ給ふな』

と言ひけれども、今は何かせん、あけて見ばや」と思ひ、見るこそくや

しかりけれ。この箱をあけて見れば、中より紫の雲三すぢ上りけり。これ

を見れば、二十四五の齡変りはてて、たちまち白髪よほひの翁となるこそあは

れなれ。

『御伽草子』「浦島太郎」による

問一 — 線部1〜3の歴史的仮名遣いを現代的仮名遣いに直しなさい。但しすべてひらがなで書くこと。

1

2

3

問二 ……線部ア〜エの主語は誰になりますか。最も適当なものを次の①〜④からそれぞれ一つずつ選びなさい。

- ① 浦島太郎    ② 八十ばかりの翁    ③ 亀    ④ その他
- ア
- イ
- ウ
- エ

問三 — 線部Aは、誰の心情を述べたものになりますか。本文中から、書き抜きなさい。

問四 次のア〜オの中から、本文の内容に合っていないものをすべて選びなさい。

- ア 浦島が、百年後、故郷に帰って来ると、人の住んでいる気配を感じず、あたりは荒れはてた野原になっていた。
- イ 八十歳くらいの翁に事情を聞かされた浦島は、自分の墓の前で悲み、和歌を詠んだ。
- ウ 亀は浦島に絶対に箱を開けてはいけないと言われたので、その言いつけを守り続けた。
- エ 二十四五の年齢であった浦島は、地上にもどってくると突然、白髪の翁になってしまった。
- オ 亀の言いつけを破った浦島は、箱の中から出てきた紫色の雲により、二十四五の年齢であったにも関わらず、たちまち白髪の翁になってしまった。

六 次の古文を読んで、あとの各問いに答えなさい。

犬の子をたいそうかわいがっていたのだろうか

ある人、ぬのこをいといたはりけるにや、その主人外より帰る時、かのぬのこ、その膝にのぼり、胸に手をあげ、口のひとつを①舐り廻る。これによつて、主人愛することいやましなり。

主人は子犬をかわいがる思いがさらけつていていくのである。

馬、ほのかにこの由を見て、②うらやましく思ひけん、「あつば

れ我もかやうにこそし侍らめ。」と思ひ定めて、ある時、主人外よ

り帰りける時、、主人の③胸にとびかかり、顔を舐り、尾を振り

などしければ、主人これを見てはなはだ④怒りをなし、棒を取つて、

人の親しい親しくないをわきまえないで、しんそ

もとの小屋に押し入れける。そのごとく、人の親疎をわきまえず、

自分から一方的なものでなし顔をするのは

わがかたより馳走顔こそはなはだもつて、をかしきことなれ。

わが身のことをよく考え

それ相応の挨拶をすべきである

わがほどに従つて、その挨拶をなすべきなり。

大変つけいなことである

(『伊曾保物語』による)

問一 部①～④の主語の組み合わせとして、最も適当なものを次のア～エの中から選びなさい。

- |   |       |      |       |      |
|---|-------|------|-------|------|
| ア | ① 主人  | ② 馬  | ③ 主人  | ④ 馬  |
| イ | ① ゐのこ | ② 馬  | ③ 馬   | ④ 馬  |
| ウ | ① ゐのこ | ② 馬  | ③ 馬   | ④ 主人 |
| エ | ① 主人  | ② 主人 | ③ ゐのこ | ④ 馬  |

問二 「かやうにこそし侍らめ」を現代仮名遣いに直しなさい。但し、すべて平仮名で書くこと。

問三 次の空欄にあてはまる内容を十字以内で書き入れなさい。

馬は自分も  と思ひ主人の胸にとびかかった。

問四 この文章で、筆者が述べようとしていることはどんなことですか。

- ア 相手をいじめると結局は自分にはねかえってくる。
- イ やたらに物まねをすと思わぬ失敗をする。
- ウ 他人をかわいがると自分もかわいがられる。
- エ 自分も他人も誰にでも挨拶をすると喜ばれる。

七 次の古文を読んで、あとの各問いに答えなさい。

歌人として優れた人物としてお仕えしていたが

今は昔、<sup>※1</sup>紫式部、<sup>※2</sup>上東門院に歌詠み優の者にてさぶらふに、<sup>※3</sup>大齋院より春つ方に、

大齋院から、春つ方に。

(大齋院は) 上東門院に 何か適当な物語がございましょうか

「つれづれにさぶらふに、さりぬべき物語やさぶらふ」

(上東門院は) 書物をお取り出しになつて

と尋ね申させたまひければ、御草子ども取りださせてまひて、

「それを差し上げたらかうか」などと云つて

「いづれをかまゐらすべき。」など、選り出させたまふに、

選びなされる

紫式部、「みな目馴れてさぶらふに、新しくつくりて<sup>②</sup>まゐらせ

させたまへかし。」と申しければ、

上東門院が「それではあなたが作りなさい」

「さらばつくれかし。」

『源氏物語』を作つて差し上げたことだ

と仰せられければ、源氏はつくりてまゐらせたりけるとぞ。

(『今鏡』による)

※1 紫式部 ・ 平安時代中期の女流文学者

※2 上東門院 ・ 一条天皇の中宮である彰子

※3 大齋院 ・ 村上天皇の第十皇女

問一 ①つれづれにさぶらふに とありますが、その意味として最も適当なものをお選びなさい。

- ア 心配しておりますが
- イ 退屈しておりますが
- ウ 残念に思っておりますが
- エ 気の毒に思っておりますが

問二 ②まゐらせさせたまへかし を現代的仮名遣いに直しなさい。

問三 文章の内容と合うものを次の中から選びなさい。

ア 紫式部は、上東門院に、大齋院のために、新しく物語を作つて棚に置いておくように命じた。

イ 上東門院は、紫式部に、新しい物語を作つて、大齋院に差し上げるよう申し上げた。

ウ 大齋院から依頼を受けた紫式部と上東門院は、二人で見なれた物語を選んで推薦し続けた。

エ 大齋院は、紫式部に命じて、上東門院に新しく物語を作つて、差し上げるよう申し上げた。

八 次の古文を読んで、あとの各問いに答えなさい。

他国にめつたに魚である。

備前の国岡山に、そこにべといふ魚あり。余国にまれなり。

領主である宇喜田直家より

芸州の小早川隆景が、

備中の笠岡城におられた時

太守宇喜田直家より、芸州小早川隆景、備中笠岡の城におはし

けるとき、かの魚を送らるる。隆景、侍に仰せ、「夜中に備前よ

家老の者たちから、朝になつたので、おきかたをいふことになり、

り、そこにべが来たほどもに、家老の衆に今朝ふるまふべきよし

侍の従者は、みなにそのことをあれまわり、

申せ。」とあれば、かせ者まはりて、「備前より今夜、そこにべ

朝になつたら、衆をもてなすがあります。

みな城に定めて下りてい。

殿お越しにて候ふ。今朝ふるまひあり。出仕あれ。」とぞ申し

ける。

殿が来られるというのできんと身づくろいをして登城したが

客の姿はない。

おのおの慇懃に出で立ち参らるるに、客とてはなし。出で

料理を記すは

たる膳部を見れば、そこにべの汁なり。右の様子を申されて、

大笑ありし。

〔醒醉笑〕による

問一 ①ふるまひあり とありますが、これを現代仮名遣いに直しなさい。

--

問二 本文の内容をまとめた次の文章について、あとの各問いに答えなさい。

宇喜田直家から小早川隆景のもとに、

A
---

 が送られてきた。隆景は、侍に対して、家老たちにお客へもてなしをするから登城するように伝えることを命じた。侍の従者からお触れを聞いた家老たちは、朝、きちんと身づくろいをして登城した。ところが出てきたのは「

B
---

」であった。その場に集まった者たちは、従者が 

C
---

 と誤解したのだと察して、大笑いした。

① 

A
---

、

B
---

 にあてはまる言葉を、古文中からAは八字、Bは六字でそのまま書き抜きなさい。

A

--	--	--	--	--	--	--	--

B

--	--	--	--	--	--

② 

C
---

 にあてはまる内容を、二十字以内で書きなさい。


九 次の古文を読んで、あとの各問いに答えなさい。

食べ物を探し

ある川のほとりに、牛一匹、ここかしこへるじきを求め歩き

かえるがその様子を見て心に思ったことは

はべりしに、かいるこれを見て心に思ふやう、「わが身をふくら

牛の大きさをいじ

しなば、必ずもやあの牛のせいほどなりなん」と思ひて、きつ

と伸びあがり、身の皮をふくらして、子どもにむかつて「今は

この牛の大きさをいじになつたか

この牛のせいほどになりけるや」とたづねければ、子どもあざ

笑ひていはく、「いまだそのくらゐなし。はばかりながら、御辺

牛に似ていません

野菜のかぶの形

は牛に似たりたまはず。まさしくかぶらのなりにこそ見えはべ

りけれ。御皮の縮みたるころはべるほどに、いま少しふくれ

させたまはば、あの牛のせいになりたまひなん」と申しければ、

かいる答へて申すやう「それこそいとやすきことなれ」と

言ひて、力およびえいやつと身をふくらしければ、思ひの外に

急に

死んでしまった。

皮にわかに破れて、腸出てて空しくなりにけり。

自分の身に不相応な能力や地位を望む人は

そのごとく、およばざる才智位を望む人は、望むことを得ず、

つひにおのれが思ひゆるゑに、かへつてわが身をほろぼすことに

あるなり。

(『伊曾保物語』による)

問一 川のほとりを歩いてゐる牛を見て、蛙はどう思ったか、十五字以内で書きなさい。


問二 子どもにむかつてとありますが、「子ども」は何に見えると言つていますか。古文中から抜き出しなさい。


問三 それこそいとやすき(簡単)ことなれとありますが、何をどのようにすることが「やすき」ことなのか、十五字以内で書きなさい。


が簡単だと言っている。

問四 蛙が死んでしまったのは、作者はなぜだと言っているか、最も適切なものを次ア～エの中から選び記号で答えなさい。

- ア 子どもにからかわれて、怒ってしまったから。
- イ 身の程をわきまえずに、無茶な行動をとったから。
- ウ 物事の限度を知らずに、調子に乗ったから。
- エ 蛙はどうしても、牛にはなれないと知ってしまったから。

--

十 次の古文を読んで、あとの各問いに答えなさい。

目新しい

めづらしと言ふべきことにはあらねど、文こそなほめでたき

遠く離れた地方

気がかりで

ものには。はるかなる世界にある人の、いみじくおぼつかなく、

かたじけなく

いかならむと思ふに、①文を見れば、ただいさまし向かひたるや

うにおぼゆる、いみじきことなりかし。わが思ふことを書きや

りつれば、あしこまでも行き着かざるらめど、②心ゆくこころこ

そすれ。

(『枕草子』による)

問一 本文中にある「文」の意味として最も適切なものを次のア～エの中  
から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 書物
- イ 手紙
- ウ 漢詩
- エ 学問

問二 めでたき とありますが、その意味として最も適切なものを次のア  
～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 美しい
- イ かわいらしい
- ウ すばらしい
- エ 有名な

問三 ①文を見れば とありますが、「文」を見る時、作者はどんな気持ちに  
なると言っているのか、最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び  
記号で答えなさい。

- ア 相手の気持ちを深く理解したような気持ち
- イ 今すぐ相手に遭いたくなるような気持ち
- ウ もう相手に合わなくても良いという気持ち
- エ 相手と向かい合っているような気持ち

問四 ②心ゆくこころこ とありますが、どのような気持ちか、最も適切なも  
のを次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 思うことが通じないことに対する不安な気持ち
- イ 手紙が遅れたことに対するすまない気持ち
- ウ 長い手紙が書いたことに対する誇らしい気持ち
- エ 思うことを書き送ったことに対する満ち足りた気持ち

★基本の古文単語★ 意味

1	やがて	すぐに・そのまま	書いて覚えよう
2	うつくし	かわいらしい	
3	けしき	様子	
4	おどろく	はっと気づく・目を覚ます	
5	おとなし	大人びている	
6	あはれ	しみじみとした趣がある	
7	をかし	風情がある・趣がある	
8	あさまし	驚きあきれ	
9	ののしる	大声で騒ぐ	
10	あした	朝・翌朝	
11	あやし	不思議だ	
12	ありがたし	めったにない・珍しい	
13	めでたし	すばらしい	
14	文(ふみ)	手紙・書物	

15	としごろ	長い間	
16	あからさまなり	ほんのちよっと	
17	ゐる	座っている	
18	つゆ	全く(ない)	
19	げに	本当に	
20	とく	早く	
21	はた	やはり	
22	つとめて	早朝	
23	つきづきし	ふさわしい	
24	さらなり	言うまでもない	
25	いみじ	たいそう(程度が激しい様子)	
26	やうやう	だんだん	
27	おぼゆ	思われる・感じられる	
28	心憂し	つらい・なさけない	
29	よろづ	色々な	



十一 次の古文を読んで、あとの各問いに答えなさい。

若狭の国の早瀬というところに、名前を「糸」という貧しい女性が住んでいました。年老いた父にお仕えしている様子が誠実で、すばらしい氣立てでした。雨風が吹き荒れる冬、漁師たちも漁の仕事ができなくて、みながつらく思っている日がありました。

その翁、「真魚のいとよきを食へむ」と言ひだしけるに、七日ばかりも日

海が荒れておりましたので、

七日ほどのあいだも

しけてはべるに、真魚とてこれらの海辺にはいづべに行きて得むかたもあら

女はなんとしても生きのいい魚を手に入れたいと祈っていた

ず。天地の神に祈るのみ、いかにも真魚をば得てしがなと祈りけるに、①し

るしにもあらず。さまれ海岬を立ち歩きて見むに、波に打ち寄せられてはべ

るなどもなからましやと思ひつきぬれば、いと寒き朝風に吹かれ行き見けれ

全く魚が手に入らないのは、私の心が汚れており、

神様が

ど、さるものも得はべらず。「こは我が心のきたなくはべるによりて、神の

願いを聞いて下さらないのだ

申すことをきこしめさぬなり。今はせむすべなければ、いかにも翁を言ひな

ぐさめて、空のけしき海の心のなほりたまはむまでは、ともかうも、もの作

父は大声でわめきちらして

りてまぬらせむ。」と思ひしかば、泣く泣く家に帰れば、翁はのりさけびて、

生きのいい魚が食へたい。食へたい。

「真魚食はむ。真魚食はむ。」とぞ②泣きをりける。糸、「ただ今、漁夫ども、

舟を多く出して釣りを始めており、

風がやみ波も穏やかになったこの夕なぎに

きつとたくさん魚を手

舟多くしたてて釣りに出ではべれば、この夕なぎにのりては、さばに魚を得

いれて、帰ってきてくれます

て帰りなむ。時も移りぬるに、朝食は心よくまゐりて待たせたまへ。よきも

あさげ

のを作りてさむらふ。」とて、干し魚などをよきさまに作りてすすめければ、

では、夕食には、

必ず

生きのいい魚を食へさせよ。

「さらば、夕食には、たがはで、真魚を食へさせよ。」とて、朝食は食ひた

翁が食へる姿を見て

とてもうれしく思っていた

り。糸、翁食ふ姿見て、③いとうれしく思ひて居立ちてはべりけり。

(その時翁が上空にあられ

とび) 鳶のがけりきて、何にかあらむ目の前に落としたるに、見れば魚のいまだ

勢いよくはねているのである

生きてあるがをどりめぐるなり。いとうれしくて、捕えてみれば、二尺ばか

りなる鱒子といふ真魚なりける。ただただ夢のさまに思ひなりて、そを持ち

父に食へすと、

たいへん喜んだのだった

きて煮もし焼きもしてまぬらせければ、翁は限りなくよろこびてけり。

(『折々草』による)

問一 なほりたまはむまでは とありますが、この部分を「現代仮名遣い」に直しなさい。

問二 ①しるしにもあらず とありますが、その具体的な内容を十字以内で書きなさい。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問三 ②泣きをりける とありますが、翁が泣いた理由を十五字以内で書きなさい。

--	--	--	--	--	--	--	--	--

問四 ③いとうれしく思ひて とありますが、糸が喜んだ理由として適切なものを次から一つ選びなさい。

- ア 海が荒れていることを理解し、翁が真魚をあきらめてくれたから。
- イ 翁のために作った朝食が、思った以上においしかったから。
- ウ 翁が糸の言うことを聞き入れて、朝食を食べてくれたから。
- エ 鳶が落とした真魚を使って、翁を喜ばせることができたから。

問五 この文章の内容に合っていないものを、次のア～エの中からすべて選びなさい。

ア 悪天候の中、漁師に無理を言って漁に出てくれるようたのんだ「糸」は、分けてもらった「真魚」を煮たり焼いたりして、食べさせることで翁を喜ばせた。

イ 真魚を食べたがる翁に思いやりの心で接し続け、天地の神への信仰を忘れなかった「糸」は、その望みどおり「翁」に真魚を食べさせることができた。

ウ 「翁」が真魚を食べたいとわめきちらしていることに手を焼いた糸は、夢の中で、鳶からもらった真魚を調理することで、翁を喜ばせることに成功した。

エ 糸は翁を思つて天地の神に祈願したことで真魚を手に入れたが、うつかり落としてしまい、上空からそこに勢いよく飛んできた鳶に食べられてしまった。

--

--

十二 次の古文を読んで、あとの各問いに答えなさい。

狩りにおいでになられた時に

水戸中納言殿、狩りに出でたまひしに、ある男、年老いたる女を負ひて、

その男

道のあたりに休みをりたるを、「いかなる者ぞ」と問はせたまひければ、知

を知っている者があつて

母を背負つて、中納言殿が狩りをしている様子

れる者ありて、「彼は人に知られたる孝行の者にて、母負ひて御狩りの様を

拝見してゐるのぞいびびと申す

米やお金を

拝し候ふなり。」と言ふ。中納言殿、おほきに感じたまひ米錢なむあまた

同じように母を背負う者

たまはりける。そののち、また、ある所にて、同じ様なる者に行き会ひて問

あるのぞいびびと申す

はせたまへば、母負ひて、ものへ行く由を申す。従者これを怪しがりて、彼

以前の親子の話聞きつけて

は先のことを聞き、それに似せて物たまふらむとするかときさきやきければ、

中納言殿うち笑ひて、「孝子をまねるは、孝子のたぐひなり。良きことのま

ねするやつかな。」とて、先の度にかはらず、米錢をたまはりけり。

(『御伽草子』による)

問一 問はせたまひければ、を現代仮名遣いに直しなさい。但し、全て平仮名になおすこと。

問二 言ふとありますが、この主語を四字で抜き出しなさい。

問三 あまたとありますが、この言葉の意味を次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 余り
- イ 貴重な
- ウ たくさん
- エ 少ない

問四 同じ様なる者 とありますが、どのような点が同じなのか、最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 村人に慕われている点
- イ 狩りの様子を見物している点
- ウ 水戸中納言の知人である点
- エ 老女を背負っている点

十三 次の古文を読んで、あとの各問いに答えなさい。

太政大臣である藤原宗輔は、たくさん蜂を飼ひ、蜂を自由に扱うことができる人物であった。そのため世間の人々は、宗輔のことを「蜂飼ひの大臣」と呼ぶほどであった。

世間の人は、役に立たないことだ

宗輔の蜂を飼ひたまふを、世人、「無益のこと。」といひけるほどに、五月

上皇の難言

上皇の目の前に蜂が飛び散ったので、

のころ、鳥羽殿にて、蜂の巢にはかに落ちて、御前に飛び散りたりければ、

人々、刺されじとて、逃げさわぎけるに、宗輔、御前にありける枇杷を一房

指先にはめる琴爪という道具を使って

取りて、琴爪にて皮をむきて、さし上げられたりければ、あるかぎり取り

使ひの者をお呼びになつて

そつとその枇杷をお渡しになつた

上皇は

つきて、散らざりければ、供人を召して、やをらたびたりければ、院は

運のいひごと

宗輔がいてくれてよかつた

とても感心なつたといふのである

「かしこくぞ、宗輔が候ひて。」と仰せられて、御感ありけり。

(『十訓抄』による)

問一 にはかに落ちてとありますが、この部分を現代仮名遣いに直し、ひらがなで書きなさい。

Blank box for writing the answer to Question 1.

問二 蜂の巢が落ちた時の「その場にいあわせた人々」の反応を二十字以内で説明しなさい。

Grid for writing the answer to Question 2.

問三 本文全体を通して、上皇が宗輔に感心したのはなぜなのか。次のア〜エの中から、最も適切なものを選びなさい。

ア 枇杷の皮を琴爪でむいたり、枇杷に集めた蜂をそつと供人に渡したりするしぐさが優雅であったから。

イ 蜂の巢が落ち、人々が騒いでいた時に、ただ一人枇杷の実をかじり、状況を眺めているしぐさに風情を感じたから。

ウ 供人の手の平にそつと蜂の巢を置くといふそのしぐさがなんとも言えない無常観を漂わせていたから。

エ 蜂の巢が落ちた時、御前にあつた枇杷の実を上手く使い、蜂を集め、うまく騒ぎを沈めたから。

Small blank box at the bottom left.

★読解に役立つ古文の言葉★

一、指示語・文章の中で登場したら、前の内容を指している。

かかる・・・このような

かく・・・このように

さ・・・そう・そのように

さる・・・そんな・そのような

二、現代語訳にする問題の時に役立つよ。

くなり・・・くである

くけり・・・くた(過去)・くだなあ(和歌や会話の時)

くたり・・・くた (動作や状態の完了)

・・・くている(動作や状態の継続)

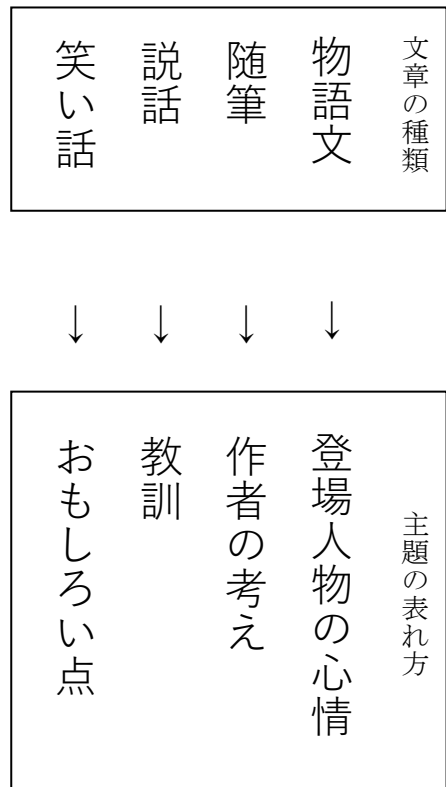
くぬ・・・くた(完了)

くむ・・・くだろう(推量)・くしよう(意志)

くず・・・くない(打消)

三、主題を解答する問題のパターン (最後の設問に多い)

◇読み取る箇所はここだ◇



※ 文章の後半に「主題」は語られます。したがって、それまでのエピソードをまとめるような内容の箇所を探すと正解にたどりつきやすいです。

四、主語を問うパターンの問題の対応

※絶対ではないけど、知っていると便利だよ。

① 主語同一パターン

A・・・てで、(A)・・・。

例 ①はご飯を食べ<sup>て</sup>、顔を洗<sup>つ</sup>て、歯を磨<sup>い</sup>て、学校に行<sup>つ</sup>た。

② 主語変更パターン

①・・・を・に・が・ど・ば、②・・・。

例 ①はご飯を食べました<sup>が</sup>、②は食べませんでした。

★枕詞で覚える文学史★

★和歌集(左の三つは、三大和歌集)

- ① 現存する最古の和歌集ときたら
- ② 最初の勅撰(天皇の命令)和歌集ときたら
- ③ 鎌倉時代成立・八番目の勅撰(天皇の命令)和歌集ときたら

★物語

- ④ 現存する最古の物語ときたら
- ⑤ 歌物語・「昔、男ありけり」・在原業平ときたら
- ⑥ 紫式部・「もののあはれ」・平安時代ときたら
- ⑦ 軍記物・琵琶法師・鎌倉時代ときたら

★随筆(左の三つは、三大随筆)

- ⑧ 清少納言・「をかし」・鋭い感性・平安時代ときたら
- ⑨ 鴨長明・鎌倉初期・無常観ときたら
- ⑩ 兼好法師・鎌倉末期・無常観ときたら

★その他

- ⑪ 江戸時代・紀行文・松尾芭蕉ときたら

漢字

読み方

- |          |            |
|----------|------------|
| ① 万葉集    | まんようしゅう    |
| ② 古今和歌集  | こきんわかしゅう   |
| ③ 新古今和歌集 | しんこきんわかしゅう |
| ④ 竹取物語   | たけとりものがたり  |
| ⑤ 伊勢物語   | いせものがたり    |
| ⑥ 源氏物語   | げんじものがたり   |
| ⑦ 平家物語   | へいけものがたり   |
| ⑧ 枕草子    | まんようしゅう    |
| ⑨ 方丈記    | ほうじょうき     |
| ⑩ 徒然草    | つれづれぐさ     |
| ⑪ おくのほそ道 | おくのほそみち    |

★指示語が関わってくる古文の演習をします★

かかる・・・このように

かく・・・このように

さ・・・そう・そのように

さる・・・そんな・そのように

I、指示語の直前部分にさかのぼる。

II、指示内容が発見できなければ、直後から探す。

古文も現代文と同じような手順でいきます。また、古文は、現代

語訳が載っていることが多く、指示語も追いやすいす。落ち着いて、「現

代語訳」を読むだけでも、あらすじや指示語も特定できます。深い読解は、

必要ありません。高校に入学してから深い読解はたくさんやりますので、

公立高校の入試レベルであれば、「広く浅く」が重要です。やろ

うと思えば、三〇五分以内で「古文は解き終わります」。

確認 次の古文を読んで、あとの各問いに答えなさい。

かぐや姫の在るところにいたりて、見れば、やはり思い悩む様子なほ物思へる気色なり。これ<sup>①</sup>

を見て、「あが仏、何事思ひたまふぞ。思すらむこと、何事ぞ」と言へば、私の大切な人よ。何を思い悩んでいらつしやるのですか。思っていることは 何ですか

「思ふこともなし。物なむ心細くおぼゆる」と言へば、翁、「月な見たま

ひぞ。<sup>②</sup>これを見たまへば、物思す気色はあるぞ。」と言へば、「いかで月を

見ではあらむ。」とて、なお月いづれば、いであつづ嘆き思へり。

問一 ①これは誰が何をしている様子か書きなさい。

問二 ②これは何を指しているか、古文中から抜き出ささい。

★重要古文単語★

なほ・・・やはり

なくそ・・・禁止を表す表現

※ 本文後ろから三行目の下。

月な見たまひぞ。【月を見るな】

十四 次の古文を読んで、あとの各問いに答えなさい。

ある人正月の支度とて、礼服麻袴を新しく作り置きけるを、ねずみ肩を食ひ破

りしを、妻などは心にかけて、その家臣などは怒りののしり、「憎きねずみ

の仕業かな。ねずみ狩りせむ。」と、集まって騒ぎ立てていたのをひしめきけるを、主かたく制して、「ね

ずみは糊あるものを食ひがちなり。食事をあてがはざるゆゑ、かかることも

なしなむ。さらに心にかくへき決してことにあらず。今より食事与へよ。」と強

く申しつけ、「ゆめゆめねずみ狩りなどすまじ。」とかたく申しつれたり。か

かる男なるゆゑや、ほどなく仕合せもよろしく、またねずみもかかる悪事、

後々はなさがりしとや。

(『耳囊』による)

問一 あてがはざるゆゑ とありますが、この部分を現代仮名遣いに直しな  
さい。


問二 かかること とありますが、どのようなことを指しているか二十字以  
内で説明しなさい。


問三 さらに心にかくへきことにあらず とありますが、この部分の意味  
として、最も適切なものを次のア～エの中から一つ選びなさい。

- ア もう一度こらしめなさい
- イ 決して覚えておく必要はない
- ウ 全く気にするべきことではない
- エ 一層の用心が必要である

--

問四 この文章の内容として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選  
びなさい。

- ア ある人(主)は、家臣の訴えをユーモアで答え、家臣を安心させた
- イ ある人(主)は、妻の忠告を受け入れ、ねずみを飢えから救った
- ウ ある人(主)は、優れた判断でねずみ狩りをし、家臣の怒りを抑えた
- エ ある人(主)は、思いやりの心でねずみを対処し、その場を収めた

--



十五 次の古文を読んで、あとの各問いに答えなさい。

相模守時頼の母は、松下禅尼とぞ申しける。守を入れ申さるる事ありける

に、禅尼みづから、明り障子の破ればかりを、小刀して切りまはしつづ張ら

れければ、兄の義景、そのひのけいめいして候ひけるが、「給はりて、なに

がし男に張らせ候はん。さよふの事に心得たる者に候ふ。」と申されければ、

「その男、尼が細工によもまさり侍らじ。」とて、なほ一間づつ張られけれ

るを、義景、「皆をはりかへ候はんは、はるかにたやすく候ふべし。まだら

に候ふも見苦しくや。」と重ねて申されければ、「尼も、後は、さはさはと張

りかへんと思へども、今日ばかりは、わざと、かくてあるべきなり。物は破

れたる所ばかりを修理して用ゐる事ぞと、若き人に見ならはせて心づけんた

めなり。」とされける、いとありがたかりけり。

(『徒然草』による)

問一 切りまはしつづ とありますが、この部分を現代仮名遣いに直しなさい。但し、全てひらがなで書くこと。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問二 さよふの事 とはどのようなことを指しているか。十五字以内で書きなさい。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問三 張られければ の主語を書き抜きなさい。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問四 「今日ばかりは、わざと、かくてあるべきなり」とありますが、禅尼は「わざと、こうしておく」ということで、「若い時頼」に何を気付かせたいと話しているか、三十五字以内で書きなさい。


入試★『徒然草』で気をつけること

・ジャンルⅡ随筆

・作者Ⅱ兼好法師

・成立Ⅱ鎌倉時代末期

▼日本三大随筆の一つ。『枕草子』『方丈記』が残り二つ。

一、面白い話や何気ない出来事の話であっても、教訓を述べることがあるので、エピソードを語った直後の教訓をつかむこと。

二、教訓は、文章の最初か最後に語られることが多い。入試に照らし合わせると、最後の問いの記述に出題される可能性もある。

三、作者である兼好法師が、本文中で感想を述べる場合があるので、埼玉県入試によく出題される「主語」を解答させる問題の際に注意。

四、冒頭の重要古文単語は他の文章でも出題される可能性が高い。

つれづれなり Ⅱ 退屈だ ・ ひまだ

古文のおわりに

「伝統や文化」に関する教育の充実が学習指導要領でなされてから、出題の傾向が変わりました。入試で「漢文」が出題されたり、記述問題が古文で出題されたりといった具合です。

入試★古文のまとめ

一、古文は現代語訳を追いながら読み進めるのがコツ

二、深い読解はせず、浅く「あらすじ」を追って読むこと

三、当たり前の内容を当たり前に読む

四、普通科・実業科問わず、十二点中九点はとろう

五、仮名遣いの問題は、三点。得点しやすいので絶対とろう